

Pope の作品における愛と結婚

石川 郁二

I

男性と女性が、相手の中に好ましいものを見つけ、愛が芽生える。お互いに引かれあい、愛情を育み、愛が高まっていくと、その結果お互いがいつも一緒にいたいと思うようになる。愛情が結婚に発展した時、2人は幸せになったと一般に言う。

結婚とは、男性と女性にとって人生の重要な出来事の1つである。それまで異なる人生を歩んできた2人が、同じ生活を営むことを約束し、人生を助け合って生きていくのである。よき伴侶を得ることができることほど幸せなことはない。

アレクザンダー・ポープは、作品の中で「愛」と「結婚」をどのように描いているのであろうか。ポープの作品 *An Essay on Man*, *The Rape of the Lock*, *Pastorals*, “Eloisa to Abelard,” “Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady,” *An Essay on Criticism* 中における愛と結婚のあらわれ方を調べてみる。

この小論は、ポープの作品における愛の表現と、愛が求める結婚について論じたものである。

II

愛というものは、生きる上で、人生を豊かにしてくれるものである。愛のない人生は空しく、寂しい。しかし、人生には愛のように喜びを与えるものだけでなく、苦痛を与えるものも多いのである。

ポープは、*An Essay on Man*⁽¹⁾ 中で次のように言っている。

Love, Hope, and Joy, fair pleasure's smiling train,
Hate, Fear, and Grief, the family of pain;
These mix'd with art, and to due bounds confin'd,
Make and maintain the balance of the mind:
The lights and shades, whose well accorded strife

Gives all the strength and colour of our life.

(EOM, II, 117-122)

人間の感情を「愛、希望、そして喜び」と「憎しみ、恐れ、そして深い悲しみ」の2種類に分けている。人生においては、これらをうまく調和させ、心のバランスを保つことが必要であり、調和がとれている光と影は我々の人生に力と色彩を与える、と述べている。

「真実の愛」について述べている箇所が *An Essay on Man* の中にある。神は人間をお互いに依存するように作っており、お互いに助け合うことが必要なのである。「真実の愛」は、共通の利害が密接に絡み合っている「欠乏、もろさ、欲望」の恩恵をこうむっている⁽²⁾。自分に無いものを求める気持が愛を芽生えさすのである。だからといって、Pope が述べている通り、愛はお金で売買できるものではないのである⁽³⁾。

表に現れない淡い恋心という愛がある。それは、特定の相手に恋焦がれている「秘められた愛」というほど、心の中で成熟している愛ではなく、「秘められた恋」とでもいべきもので、愛になる前の段階と考えられる。

愛情がもとで恐ろしい罪が起こる、という導入で作品が始まっている *The Rape of the Lock*⁽⁴⁾ には、まだ熟していない淡い恋心と思われる愛が扱われている。作品の中には恋に関してそれほど多くの記述は見られないが、要所要所では恋を思わせる描写がある。

エアリアルがベリンダに「ある恐ろしい出来事」が起こることを予言し、用心するように警告するが、ベリンダが目を覚まし、恋文に目をとめ読み始めると、彼女は女性の慎みを忘れ、エアリアルの警告をも忘れてしまうのである⁽⁵⁾。

トランプゲームのオンバーでベリンダは男爵たちと勝負をし、最終的に彼女はそのゲームで勝ちを得る。そのことが直接の原因となり、ベリンダの巻き毛は男爵によって切られてしまう。ベリンダの髪の毛が切られる直前に、エアリアルはベリンダの胸の奥底を探ってみる。そして、彼女の胸の中に潜む「この世の恋人」を見つけ、エアリアルはベリンダを守護する役目から退いてしまう。

Just in that instant, anxious *Ariel* sought
The close Recesses of the Virgin's Thought;
As on the Nosegay in her Breast reclin'd,
He watch'd th' Ideas rising in her Mind,
Sudden he view'd, in spite of all her Art,
An Earthly Lover lurking at her Heart.
Amaz'd, confus'd, he found his Pow'r expir'd,
Resign'd to Fate, and with a Sigh retir'd.

(RL, III 139-146)

「この世の恋人」が誰であるのかということに関しての明言は作品の中にはない。恋人のためになら、自分のすべてを抛ってもよいというほど突き詰めた思いまで、ベリンダの恋が高まっているわけではないのである。

男爵がベリンダの巻き毛をはさみで切る時、髪の毛を守ろうとして、開いたはさみの刃の間にシルフが入る。しかし、男爵が手にしたはさみはシルフともどもベリンダの巻き毛を切ってしまうのである。

この作品には、淡い恋心を暗示させる描写もあるが、特定の愛する者を恋焦がれて、愛の世界で喜びを感じるという形で作品は展開していない。それは作品の主題が違うので、仕方のないものである。

我々は誰かを愛そうと身構えて、人を愛するわけではない。愛は防ぎようがないもので、知らず知らずの内に人の心に忍び込み、愛の感情を植え付けるのである。“Eloisa to Abelard”⁽⁶⁾の中に次のような詩行がある。

Love, free as air, at sight of human ties,
Spreads his light wings, and in a moment flies. (E1Ab, 75-76)

愛の神は人間の結びつきを見るや、軽やかな翼を広げ空中を飛び、愛の矢を射るのである。それを防ぐ方法は人間にはない。

Pastorals にあるように、木陰を作るぶなの木や小川のせせらぎは、太陽の光を遮ったり、涼しさを与えてくれるが、それら自然の樹木でも、「キューピッドの光は通」してしまうのである⁽⁷⁾。

相思相愛の状態は2人にとって最も幸せなものである。“Eloisa to Abelard”にそのような至福の状態が描かれている。

Oh happy state! when souls each other draw,
When love is liberty, and nature, law:
All then is full, possessing, and possest,
No craving Void left aking in the breast:
Ev'n thought meets thought ere from the lips it part,
And each warm wish springs mutual from the heart.
This sure is bliss (if bliss on earth there be)
And once the lot of *Abelard* and me. (E1Ab, 91-98)

エロイーザとアベラールが愛し合っていた時の状態を、エロイーザが思い出している描写である。

お互いの魂が引き付け合い、自由に愛し愛され、それを遮る掟もない。2人はお互いにすべてを所有し、言葉に出さなくとも相手のことを理解できる。胸の中に空虚感はなく、温かい望みが心から生じる。このような状態を「天上の喜び」だとエロイーザは語っている。

すべての愛がこのような状態で永続すれば、愛の結末は「幸」の一字で片付いてしまうであろう。しかし、相思相愛の状態が何かによって邪魔され長く続かないところに、愛の苦悶が始まるのである。

愛する者に喜びだけではなく苦しみをも与える愛は、その愛が高まり、成熟する過程で我々が味わうことができるものであろう。

真剣に人を愛するようになり、愛の奴隷になると、前後の見境もなくなり、自分自身をも見失うようになる。“Eloisa to Abelard”におけるエロイーザの愛は、一時は相思相愛の愛であったが、アベラールと離れ離れになり、エロイーザがその天上の喜びから地上の苦しみに落とされ、かなり時間がたったところから作品は始まっている。女子修道院にいるエロイーザにアベラールからの手紙が予期せぬ時に届く。それまで自分の愛情を抑制していたエロイーザは、その手紙によって心の奥底に抑えていた感情に火をつけられ、過去の楽しかったアベラールとの思い出が心によみがえってくる。

若いエロイーザはアベラールから「愛することは罪ではない」と教えられたのである。

From lips like those what precept fail'd to move?

Too soon they taught me 'twas no sin to love. (ElAb, 67-68)

「愛することは罪ではない」と同じ意味のことを、疑問文ではあるが、“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady”⁽⁸⁾の中でも語っている。

Oh ever beauteous, ever friendly! tell,

Is it, in heav'n, a crime to love too well? (Elegy, 5-6)

「天上では」と挿入されているが、これは薄倅の婦人がすでに死んでいるためである。薄倅の婦人の救済をポープは望んでおり、この作品ではギリシャ・ローマ的な考え方から愛を肯定しようとするポープの姿勢が感じられる⁽⁹⁾。

この薄倅の婦人は愛のために自殺をした人である。“Eloisa to Abelard”と主題は違う。罪という単語に、宗教上の罪である「sin」と、法律上の罪である「crime」が使われている。地上の宗教上の罪なのか、天上における掟上の罪なのか、という違いはあるにしても、ポープの意図していることは同じで「愛することは罪ではない」ということである。どちらもこの世では実ら

ぬ愛を扱っているものであり、その意味では同じ悲恋という部類に入る作品である。

アベラールを恋焦がれるエロイーザは、愛のためにならすべてを捨ててもかまわない、と思う。名声、富、名誉などは愛に比べると何の価値もないものだと考える。

Let wealth, let honour, wait the wedded dame,
August her deed, and sacred be her fame;
Before true passion all those views remove,
Fame, wealth, and honour! what are you to Love? (E1Ab, 77-80)

本当に愛していれば、他の世俗的なものは取るに足りないものであり、愛の成就だけを真剣に求めるエロイーザがここには表現されている。

エロイーザの愛情はさらに燃え上がり、アベラールのためになら神を失ってもよいとまで思いつめる。

Dim and remote the joys of saints I see,
Nor envy them, that heav'n I lose for thee. (E1Ab, 71-72)

アベラールとの愛に神を忘れ、神の恩寵よりもアベラールの愛を求める。苦悩するエロイーザの心には、女子修道院へ入る前に経験したアベラールとの愛が未だに生きており、それが彼女の心を大きく支配しだすのである。アベラールの愛を失うことは自分のすべてを失うことだ、とまで想い焦がれるエロイーザが描写されている⁽¹⁰⁾。

“Eloisa to Abelard” の中にエロチックと思われるような描写がある。夜になりエロイーザの良心が眠り、悪魔がエロイーザのすべての抑制を取り除くと、解き放たれたエロイーザの魂はアベラールとの愛の歓喜に酔いしれる。

O curst, dear horrors of all-conscious night!
How glowing guilt exalts the keen delight!
Provoking Dæmons all restraint remove,
And stir within me ev'ry source of love.
I hear thee, view thee, gaze o'er all thy charms,
And round thy phantom glue my clasping arms. (E1Ab, 229-234)

アベラールの幻を抱擁するエロイーザは、夜のしじまの中で悶え苦しむ。

恋焦がれる者にとって、肉体的な愛の行為を想像することは、愛する者が経験する1つの過程であり、必然的なものと考えられる。しかし、修道女であるエロイーザにとっては、そのこと自体が罪を犯すことになり、それだけ余計に苦悩するのである。

愛に苦悩している姿は、Pastoralsの中にも見られる。第二の牧歌である「夏」の中に次のような描写がある。

On me Love's fiercer Flames for ever prey,
By Night he scorches, as he burns by Day. (Ps, Su, 91-92)

望みなき愛に苦悩するアレクシスは、愛の神の激しい炎に昼も夜も焼かれ、恋焦がれるのである。愛する相手が冷たければ冷たいだけ、愛する者への慕情は激しくなるのである。

愛に苦悩し、絶望し、後悔することも、身を切るほどの切なさとは言え、それらはまた楽しい苦悶でもある。もしそのような愛の責め苦に耐えることができれば自分の愛が成就するということならば、愛に苦悩する者は、辛いだろうが喜んでそれらを耐え忍ぶであろう。それも愛に囚われた身にとっては経験しなければならぬ過程の1つであり、それらを通り越して、愛は本物になっていき、結びつきが強まるのである。

Ere such a soul regains its peaceful state,
How often must it love, how often hate!
How often, hope, despair, resent, regret,
Conceal, disdain—do all things but forget. (E1Ab, 197-200)

忘れること以外ならば、どんなことでも苦にならないというエロイーザのこの言葉は、彼女の苦悩と共に灼熱の愛情をも感じさせる。

前出の *An Essay on Man* で、人間の感情を大きく2つに分類していることを考えると、愛は恐れや深い悲しみ等をも乗り越えることができる感情ということになる。ここでは愛の感情が、他方の感情より勝っているのである。

しかし、感情の中で愛が勝っているとしても、それは生存している限りのことである。死んでしまえば、愛がすべてに勝っているわけではないし、人の運命を越えられるものでもない。“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady” の中では、死後には生前の熱烈な愛も役に立たないと語っている。

How lov'd, how honour'd once, avails thee not,

To whom related, or by whom begot;
 A heap of dust alone remains of thee;
 'Tis all thou art, and all the proud shall be! (Elegy, 71-74)

生きている時に、どんなに愛され、どんなに尊敬されたとしても、埋葬され、土の山ができれば、それが存在するすべてである、と言っている。

しかし、生きている時は、感情に左右されるのが人間の性である。

自分の愛情に応えてくれないアベラールに不満を持っているエロイーザでも、アベラールのことを悪くは考えていない。自分の燃える愛に対して、静かに見守っているかのようなアベラールに一途に想い焦がれるエロイーザには、恐れるものは何もないのである。自分の愛に対する障害が多ければ多いほどそれだけますます愛を貫きたいという悲しいまでのやるせなさに、相手を想う純真な心が縛られてしまい、その頑なさがかえって不遜と思えるような考えにエロイーザを導くのである。そのことが相手をも傷つけてしまうということを、エロイーザは冷静に考えられないのである。

Come *Abelard!* for what hast thou to dread?
 The torch of *Venus* burns not for the dead;
 Nature stands check'd; Religion disapproves;
 Ev'n thou art cold—yet *Eloisa* loves. (ElAb, 257-260)

この世での愛の成就を願うエロイーザは、アベラールの態度が冷たく感じられるのである。激しい愛に苦悩する人たちにとって、その救済を願い、心の安らぎを求める描写もある。*Pastorals* の「夏」の中に、次のような言葉がある。

But see, the Shepherds shun the Noon-day Heat,
 The lowing Herds to murm'ring Brooks retreat,
 To closer Shades the panting Flocks remove,
 Ye Gods! and is there no Relief for Love? (Ps, Su, 85-88)

羊飼いたちには真昼の暑さを避けることができる場所があり、牛の群れは小川へ、羊たちは木陰に移動するのに、愛する者には心の安らぎがないのか、と神々に訴えているのである。この詩行の後に、暑い太陽はより柔らかな光となり、旅の終わりの大海へと沈む、というものがある。灼熱の太陽も時間が立てば安らぎがあるのに、激しい愛に身悶える者は、その愛が続くかぎり安ら

ぎはないのである。

そのような激しい愛にも、相手を思い遣る時がある。エロイーザが神に助けを求め、アベラールのことを考える時である。

How the dear object from the crime remove,
Or how distinguish penitence from love? (ElAb, 193-194)

神に助けを求めるといっても、この段階ではエロイーザの心にはまだアベラールへの思慕の念が大きく、心底から神のことを考えるという段階までに至ってはいない。神への祈りが「敬神」から「絶望」からなのかわからない、とエロイーザ自身、自分の気持を確信することができない迷いがあるのである。しかし、神に救いを求める気持が彼女の心の中で起こっていることは確かである。愛しい人を罪人にしたくはない、後悔と愛の区別をどのようにしたらよいのか、と問うエロイーザに、相手を思い遣る気持が生まれ、その気持が大きくなってくる。

自分の愛にのみ目をやって、愛を貫き通すことばかりに夢中になっている時は、感情の支配下にいると言えるだろう。冷静になり、理性が働いてくると、愛する相手のことも考えるようになる。自分のおかれている状況や相手の立場を考慮するようになることは、感情よりも理性が勝ってきている証拠と言える。理性が頭を持ち上げてきてエロイーザの愛は徐々に変化し、落ち着いた愛になってくるのである。

そして永遠の休息に抱かれることを願うエロイーザは、アベラールへの愛より、神の愛を受け入れるというように変化している。

Thy oaths I quit, thy memory resign,
Forget, renounce me, hate whate'er was mine.
Fair eyes, and tempting looks (which yet I view!)
Long lov'd, ador'd ideas! all adieu! (ElAb, 293-296)

アベラールのことを断念し、楽しい思い出を放棄するとはいっても、アベラールとの愛の終焉をエロイーザが本当に望んでいるとは思えない。なぜならば、このことを言っているエロイーザの目はアベラールの上に注がれているからである。自分を忘れてくれるように願ってはいるが、それは、身悶える激しい愛が穏やかな落ち着いた愛に変化しつつある証拠と言えるであろう。

穏やかな愛について言えば、エロイーザに呼びかける精霊の言葉の中に表現されている。かつてはエロイーザと同じように愛の犠牲者だった精霊が、嘆き悲しむエロイーザに語りかけ、エロイーザを招くのである。

Once like thy self, I trembled, wept, and pray'd,
 Love's victim then, tho' now a sainted maid:
 But all is calm in this eternal sleep;
 Here grief forgets to groan, and love to weep,
 Ev'n superstition loses ev'ry fear:
 For God, not man, absolves our frailties here. (E1Ab, 311-316)

愛の犠牲者だった時、その精霊も今のエロイーザと同じように震え、泣き、そして祈っていたのである。しかし今は、神の救いを受け入れ、平穏な心を取り戻している。神は我々の浅はかな弱い心を許してくれるのである。

「永遠の眠り」というのは死を意味しているのであろう。死ということで愛は癒されるのである。*Pastorals* の「夏」の中に、愛の神から「唯一の病気」である恋心をうつされると、癒すことはできないのか、と問う詩行が見られる⁽¹¹⁾。生きている間、愛を癒すことができないとすると、ここでも愛の救済として死が考えられるのである。

清廉潔白なウェスターリスのことを考えるエロイーザは、ウェスターリスを羨ましく感じている。欲望は落ち着かされ、愛情は高ぶることなく、神の恩寵に包まれている。

For her th' unfading rose of *Eden* blooms,
 And wings of Seraphs shed divine perfumes;
 For her the Spouse prepares the bridal ring,
 For her white virgins *Hymenæals* sing;
 To sounds of heav'nly harps, she dies away,
 And melts in visions of eternal day. (E1Ab, 217-222)

この詩行でも死というものが大きな役割を果たしているようである。アベラールを諦めきれないエロイーザの愛が静かな落ち着いたものになるためには、神を受け入れ、この世と決別することが不可欠であり、それによって初めてエロイーザは苦悶のない愛を手に入れることができるのかもしれない。

III

結婚について総合的に考えようとする、作品にあらわれる愛情表現ということだけではなく、様々な分析が必要になってくる。例えば、18世紀の英国社会における一般的に行なわれていた

結婚、当時の結婚に対する考え方、ポープ自身の人生における結婚に対する考え方等である。しかし、それらは別の機会に取り扱うことにし、この小論では、作品に表現されている結婚について論じることにする。

作品では、愛情が幸せな結婚で締め括られるというものがない。しかし、結婚の願望、一緒になりたいという願いは表現されている。時代が変遷しても、恋人たちの愛情が真剣なものになり、幸せな愛が結婚へと繋がることを望むのは、愛する2人にとって当然の成り行きと言えるであろう。

ポープは、*An Essay on Man* の中で次のように言っている。

Look round our World; behold the chain of Love
Combining all below and all above. (EOM, III, 7-8)

世界を見回してみると、「愛の鎖」が下と上を結びつけており、個々のものが引き付け、引き付けられているのである。

愛の鎖が結びつけるものは、上下だけではなく、同類の異性をも結び付けているのがわかる。

Not Man alone, but all that roam the wood,
Or wing the sky, or roll along the flood,
Each loves itself, but not itself alone,
Each sex desires alike, 'till two are one. (EOM, III, 119-122)

それぞれのものは自分自身を愛するが、自分だけを愛するわけではないのだ。人間以外の生物の雄と雌もそうだが、人間の男性と女性も、2人が1つになるまでそれぞれが欲望を持ち、求め合うものである。人間と社会に関して述べている中の、社会と理性についての論考に出てくる詩行である。

男性と女性が1つになり、子供が生まれ、家族を形成する。父母は子供を育て、その子が成長し、またその子も異性と1つになり、自分たちの子供をもうける。その繰り返して種族が永続していくのである。結婚とは重要な社会制度の1つと位置付けられているのである。

生物の本能である「性」には種族保存の役割があるとしても、すべての人間はそのことを第一目的として、人を愛し、結婚するわけではないだろう。世の中には、家系の存続を願い結婚をする、政略的に結婚をさせられるということがあるとしても、それだけを願う結婚、愛のない結婚は空しいものである。結婚に至る過程、つまり2人に愛情が芽生え、その愛が成熟し、お互いに満足いくものにならなければ、幸せな結婚は望めないであろう。

愛する者にとっては、愛する相手と一緒にすることを阻害したり、障害となるものがあると、反発し、呪うことまでするのである。“Eloisa to Abelard”の中でエロイーザは、愛が作ったものの以外のすべての掟を呪っている。

How oft', when press'd to marriage, have I said,
Curse on all laws but those which love has made! (EIAb, 73-74)

結婚ということを考えるエロイーザは、結婚にまつわる諸々の問題を一切無視し、純化している。愛するということに対して、より自由になることだけをエロイーザは願っているのである⁽¹²⁾。世俗的な名声、富、名誉というものは、愛それ自体とは関係のないものである。愛の成就以外の願望はない、自分たちの愛の障害となるものは取り除きたい、と思うことは当然のことである。まして、愛に基づかない結婚、義務としての結婚をエロイーザは否定しているのである。

アベラールと一緒にになりたいと真剣に願っているエロイーザだが、彼女とアベラールの状況を考えると、女子修道院にいるエロイーザにとって結婚は程遠い望みである。

結婚の絆とは愛の行き着くところにあるのであるから、結婚は愛の作ったものと言えるであろう。

しかし、社会制度の1つとしての結婚を考えると、「結婚する」ということは、一般的には、教会に行き、神の前で2人の愛を誓い、夫と妻になることである。社会に対し、夫婦として認めってもらうことが必要なのである。だから、愛だけを純粋に追い求めるだけで他のことをすべて無視しては、結婚を現実のものとすることはできないのである。そうであるならば、女子修道院にいるエロイーザ、さらに神に対して反発しているエロイーザには、アベラールと結婚できる状況にはないのである。

しかし、エロイーザはアベラールの妻になることを願望している。

Should at my feet the world's great master fall,
Himself, his throne, his world, I'd scorn 'em all:
Not *Cæsar's* empress wou'd I deign to prove;
No, make me mistress to the man I love;
If there be yet another name more free,
More fond than mistress, make me that to thee! (EIAb, 85-90)

たとえ世界の偉大な支配者が、彼の王座や彼の世界をすべて捧げ、エロイーザに求婚したとしても、エロイーザにはそれを受け入れる意志はない。シーザーの皇后にもなる積もりはない。エロ

イーザの望みは愛するアベラールの妻になることである。

しかし、エロイーザは「妻」とか「主婦」という名前に固執しているわけではなく、アベラールと一緒にになりたいということだけが望みなのである。ただ、アベラール自身はエロイーザの愛ほど燃えていないのである。アベラールがエロイーザを愛していないということではなく、アベラールの愛は穏やかな、落ち着いた愛になっているようである。

作品は、同じ墓に葬られることを願って終わっている。作品のエピローグの中に次の詩行がある。

May one kind grave unite each hapless name,
And graft my love immortal on thy fame. (ElAb, 343-344)

エロイーザはあの世でアベラールとともにいることを望んでいる。自分の悲哀のすべてが終わり、反抗的な心が鼓動しなくなる死というものを考えた時、エロイーザの願望は大きく変わっていくのである。アベラールと結婚したいという願望は、この時点のエロイーザにはもうないのである。現世での結婚は諦めなければならない、それは実現不可能だと悟った時に、あの世でアベラールと一緒にいたい、そして自分の愛がアベラールのためにプラスになることをエロイーザは願っているのである。

作品の中でアベラールのことを忘却するというような詩行があるが、それはエロイーザのせつない気持の反動としてあらわれているだけのことで、エロイーザはアベラールを本当に忘れたいと願っているわけではないのである。エロイーザの愛は永遠に続くものである。

The Rape of the Lock では結婚という言葉すら出てこない。ベリンダの淡い恋心では、それも特定の男性を作品の中で明示していない恋では、結婚という思いにまでは至らないのも無理はない。

Pastorals ではどうであろうか。愛を謳歌する描写や、悲恋を訴えるものはあるが、結婚というところまではやはり内容が進んでいない。

胸に短剣が突き刺さり、血を流している亡霊の登場から始まる“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady”では、薄倅の婦人がすでにこの世にいないのである。ポーブはこの薄倅の婦人の救済を望んでいるようだが、現世の結婚という形ではない。

キリスト教では自殺は罪である。しかしポーブは自殺の理由によっては救済されてしかるべきではないか、と考えている。

Is there no bright reversion in the sky,
For those who greatly think, or bravely die? (Elegy, 9-10)

キリスト教の教義ではなくギリシャ・ローマ的な考え方から、勇敢に死ぬ人々、愛のために自ら死を選ぶ者には、救済の手を差し伸べてもよいのではないかとポープは考えているのである。

もし *Unfortunate Lady* が救済され、キリスト教でいう罪人ではないということになるならば、彼女の野辺の粗末な墓は、宗教上神聖とされるキリスト教の墓地内に移されるであろう。愛のために自ら死を選んだ婦人の魂は自由になり、おそらく愛する人のところにすぐに飛んで行くことを願うだろう。

結婚を願う描写は、愛が成熟し、愛の感情が高まっている時にあらわれるのである。しかし、そのことがすぐに結婚に結びつくわけではない。愛が幸せな結婚に結びつくためには、結局、「一途に思い詰めた愛」というものだけでは駄目なようである。

結婚後の夫と妻のことにに関して少し触れておきたい。*An Essay on Criticism*⁽¹³⁾ の中に夫と妻の関係について触れている箇所がある。

Some, to whom Heav'n in Wit has been profuse,
 Want as much more, to turn it to its use;
 For *Wit* and *Judgment* often are at strife,
 Tho' meant each other's Aid, like *Man* and *Wife*. (EOC, 80-83)

想像力と判断力のことを述べている詩行だが、お互いに助け合わなければならないのにしばしば争いをする、それは夫と妻のようだ、と語っている。夫婦になってもお互いのことを思い遣るような愛が持続できれば幸せなことではあるが、結婚して一緒に生活を始めると様々な煩わしいことも起こり、恋愛時代と違ってしまうことは明らかである。そこに現実の生活というものが出てくるのである。

しかし、愛の神の下にいる時は、そのようなことは考える余地もない。自分の愛に生き、それが高まり、結婚したいと望むのである。

IV

ポープの作品における愛の表現には様々なものがある。まだ真の愛情まで進展していないものもあれば、秘められた愛が再び燃え上がり灼熱の愛になっているものもある。愛のために命を捨てるといふものもあれば、自分の愛をわかってくれないという愛もある。それぞれの愛は別な作品で取り扱われているが、まったく別な愛ではなく、表に現れる形が異なっているだけで、愛ということでは1つのものであろう。

結婚は、愛が成熟し高まってこないと作品の中で表現されるようにはならない。結婚とは、愛

情が成熟し一緒にいたいという思いが強くなってきて初めて思い始めるもので、単に恋心を抱いた状態ではまだ結婚というところまで考えがいかないし、遠い存在のものである。

結婚という考えが頭を持ち上げたとしても、それはまだ現実の結婚にはすぐに結びつかない。愛が結婚を望むとしても、それはまだ感情の産物としてのものである。愛という感情に、現実的なものが加味されて初めて結婚ということが実現可能なものになるのである。

この世での結婚が不可能なものだとわかると、「一緒にいたい」という願望が前面に出てくる。結婚という形よりも実質的に一緒にいる、常に傍にいる、ということで、愛の感情を満たそうとしているのである。

結論としては、愛には様々なものがあるが、それがそのまま現実の結婚に結びつくわけではない。愛が成熟し結婚を望んだとしても、その結婚が実現できないとなると、結婚という現世の社会的制度よりも「一緒にいる」という本質的なものを願望するようになるのである。

〈注〉

- (1) Pope, Alexander. *An Essay on Man* in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. London: Methuen & Co. Ltd., 1968. 詩の引用行数の前にある EOM は *An Essay on Man* を略した記号である。
- (2) ——. *An Essay on Man*. II, ver. 255.
- (3) ——. *An Essay on Man*. IV, ver. 188.
- (4) ——. *The Rape of the Lock* in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. London: Methuen & Co. Ltd., 1968. 詩の引用行数の前にある RL は *The Rape of the Lock* を略した記号である。
- (5) ——. *The Rape of the Lock*. Ver. 107 to 120.
- (6) ——. “Eloisa to Abelard” in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. London: Methuen & Co. Ltd., 1968. 詩の引用行数の前にある EIAb は “Eloisa to Abelard” を略した記号である。
- (7) ——. ‘Summer’ of *Pastorals* in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. London: Methuen & Co. Ltd., 1968. Ver. 13 to 14. 詩の引用行数の前にある Ps, Su は *Pastorals* の ‘Summer’ を略した記号である。
- (8) ——. “Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady” in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. London: Methuen & Co. Ltd., 1968. 詩の引用行数の前にある Elegy は *Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady* を略した記号である。
- (9) 拙論「“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady” と “Eloisa to Abelard”」を参照。『城西人文研究』第 15 巻第 1 号（昭和 62 年）に掲載。
- (10) Pope, Alexander. “Eloisa to Abelard.” Ver. 117 to 118.
- (11) ——. ‘Summer’ of *Pastorals* in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. Ver. 12.
- (12) Geoffrey Tillotson, ed. “Eloisa to Abelard” in *The Poems of Alexander Pope*. By Alexander Pope. Vol. II. London: Methuen & Co. Ltd., 1972. 325-56.
- (13) Pope, Alexander. *An Essay on Criticism* in *The Poems of Alexander Pope*. Ed. John Butt. London: Methuen & Co. Ltd., 1968. 詩の引用行数の前にある EOC は *An Essay on Criticism* を略した記号である。